

第4回白壁賞は渡二郎氏ら、 第23回村上記念「胃と腸」賞は 飯田三雄氏らに

11月18日(水)、ホテルグランヴィア岡山で行われた第38回「胃と腸」大会の席上、第4回白壁賞と第23回村上記念「胃と腸」賞の受賞式が行われた。第4回白壁賞は渡二郎・他「Early Nonpolypoid Colorectal Cancer: Radiographic Diagnosis of Depth of Invasion」(Radiology 205: 67-74, 1997)に、第23回村上記念「胃と腸」賞は飯田三雄・他「家族性大腸腺腫症における胃・十二指腸病変の長期経過」(胃と腸 32: 563-576, 1997)に贈られた。

司会の測上忠彦氏(松山赤十字病院消化器科)から、まず白壁賞受賞者の発表があり、渡氏が登壇した。白壁賞は故・白壁彦夫先生のご業績を讃えて、消化管の形態診断学に寄与した論文に贈られるもので、「胃と腸」32巻に掲載された全論文に加えて、応募論文(1997年に発表されたもの)が選考対象となる。今回は、応募論文の中から初めての受賞であった。

早期胃癌研究会代表の八尾恒良氏(福岡大学筑紫病院消化器科)から受賞者代表の渡氏に賞状と賞牌が、医学書院からは賞金が贈られた。八尾氏は「英語の論文では初めての受賞であり、日本の早期大腸癌を世界に知らしめたという意味で白壁賞にふさわしい論文だと思う。日本の優れた、「胃と腸」を中心とした診断学がもっと世界に認められるように努力していただきたい。」と述べた。続いて、選考委員を代表して吉田茂昭氏(国立がんセンター東病院内視鏡科)が選考経過を説明し、「渡先生の論文は日本人としてはよくわかっていることであるが、「Radiology」というグローバルな発信ができる雑誌に、わかりやすく日本の診断学を解説し、自分の症例を使って結果を出したことが評価された。白壁先生は米国の放射線学会のキャノンメダル賞を日本人として初めて受賞されているが、今回「Radiology」に掲載された渡先生の論文が白壁賞を受賞され、パイオニアとして米国の放射線学会に乗り込んで行った白壁先生の後を追って若い人たちが欧米に発信したとを感じる。」と述べた。

受賞者を代表して渡氏は「この論文を書くにあたりご指導くださった斉藤裕輔先生、小原剛先生はじめスタッフの方々に感謝したい。高後裕先生には、白壁先生から教わったことを世界に知らしめるためにも英語で論文を書きなさいと激励をいただいた。1992年に、当時の並木正義教授から勧められ、3年間ほど白壁先生のもと早



▲第4回白壁賞を受賞した渡二郎氏。



▲八尾恒良氏(右)から渡氏(左)に賞状が手渡された。



▲満員となった第38回「胃と腸」大会会場(ホテルグランヴィア岡山)。

期胃癌検診協会で勉強させていただいた。本当に雲の上のような先生で、初めてお会いしたときに、向かい合せて食事したというだけで怒鳴られ、その昼食を食べながら「胃と腸」を読まされたり、箸の持ち方が悪い、箸を持ったまま醤油を持つな、と注意された。夜遅くまで厳しくX線のご指導をいただいたりしたが、その白壁先生のお名前のついた名誉ある賞をいただき感激している。X線を撮る先生は少なくなってきたが、まだ撮り続ける技師や医師がいるし、綺麗な写真を撮るということは大事だと思う。白壁先生はX線、内視鏡、病理の1対1の対応を非常に大事にされたし、X線を綺麗に撮れる者は内視鏡も綺麗に撮れるということで、形態学の基本は写真を撮ることだと教えられた。これからも綺麗な写真を撮る努力を続けていきたい。”と感謝の言葉を述べ、満場の拍手を受けた。

続いて、23回村上記念「胃と腸」賞の贈呈が行われた。本賞は故・村上忠重先生のご業績を讃えて、消化器、特に消化管の病態解明に寄与したものに贈られるもので、「胃と腸」32巻に掲載された全論文が選考対象となる。飯田氏は第3回の本賞を「家族性大腸腺腫症の胃病変」など3論文で受賞しており2回目の受賞となった。

八尾氏から賞状と賞牌が、医学書院から賞金が、受賞者代表の飯田氏に贈られた。八尾氏は“飯田先生にとって、家族性大腸腺腫症の胃・十二指腸病変は25年ぐらい前から続けている仕事で、長期経過でその病態を明らかにしたところが評価された。以前にも胃・十二指腸病変で「胃と腸」賞を受賞されているし、1つの仕事を長期間続けていくことがいかに大事であるかが実証されたと思う。”とお祝いの言葉を述べた。吉田先生からは選考経過が説明され、“今回の家族性大腸腺腫症における胃・十二指腸病変の長期経過は実に20年以上の経過の中で、胃・十二指腸病変が大腸腺腫症において手術の適応、あるいは積極的な治療の対象ではないということを明確に示した点で評価された。消化器の診断というのはすぐに結論が出ないものだが、長期間、根気よく、しかも推定ではなく definitive に結論を出されたということが評価された。”と述べた。

受賞者を代表して飯田氏は“この論文は自分では自信があったが、1度受賞しているので該当しないと思っていた。2回も同じ賞をもらえんとは、本当に幸運だと思う。以前、1978年に「胃と腸」賞をいただいたが、胃・十二指腸病変がある患者さんを、いつ乳頭部に癌ができるか、いつ胃癌ができるかという不安にかられた一念で経過を追った。患者さんが来ないときは呼び出したりにして自分でずっと経過をみてきた。研究の発端を与え



▲第23回村上記念「胃と腸」賞を受賞した飯田三雄氏。



▲八尾氏(右)から飯田氏(左)に賞牌が手渡された。

てくださった八尾恒良先生、九大時代にお世話になった渡辺英伸先生(現：新潟大学1病理)、外科の大里敬一先生(現：産業医大病院長)、伊藤英明先生(現：産業医大第1外科)、こういった先生方にご協力とご指導をいただいたからこそ、これまで研究ができたと思っている。川崎医大に来て5年になるが、この間も follow-up の機会を与えてくれた九大第2内科のメンバー、木村外科病院院長・木村豊先生、酒井技師長ならびに職員の方々に深く感謝したい。また、川崎医大消化器内科の医局員にも感謝したい。”と受賞の喜びを語り、盛大な拍手を受けた。